

発がん汚染? でSOS

消費量の6、7割が建材などに
 天然の無機繊維状
 石綿 鉍物の緑糸、耐熱、耐摩耗、耐腐食、防音性などに優れ、日本では年間約二十万トン消費。うち六七割

が、石綿スレート材などの建材に使われる。また断熱用の布や糸、自動車のブレーキなど用途は約三千種の工業製品に及ぶ。代替品の開発が急がれているが、コストや性能面から難航している。

天井からはげ落ち 学生ら大ショック

環境研究の「殿堂」が石綿汚染―大阪工科大学(大阪府吹田市、藤井克彦学部長)の環境工学科研究棟で、実験室や教室の天井に発がん性や肺障害の原因物質として問題化している石綿(アスベスト)が使われ、最近その一部がはげ落ちるなどしていることが分かった。石綿工場の従業員が肺がん死亡率が一般より目立って高いのもその危険性が指摘され、規制の動きも出てきたのに、学生、研究者の間では石綿繊維の吸引による健康への不安が表面化、授業を敬遠する動きや撤去を求める声も出た。新たな環境問題とされる石綿汚染が、環境研究の本拠地を持ち上がったことに大層ショックを受けている。

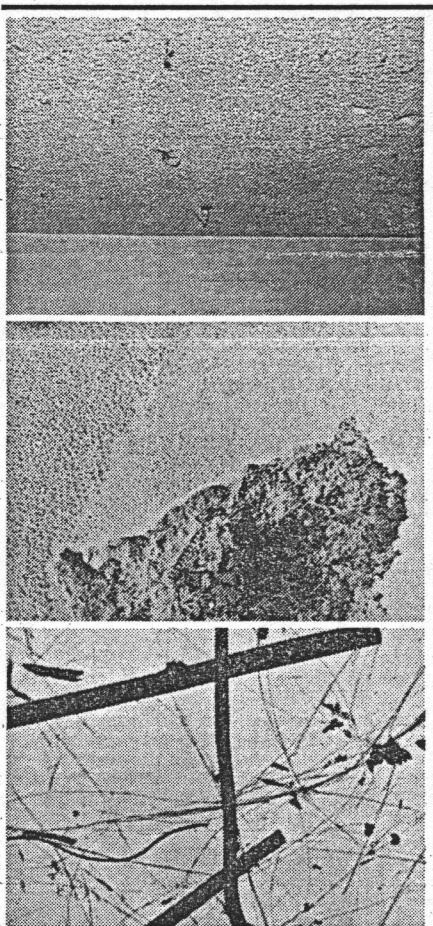
同研究棟は鉄筋コンクリート六階建て(延べ約二、九〇〇平方メートル)。四十五の建設で、石綿は断熱材として全体半分に当たる一三、五階を建てた。通風の天井表面に吹き付けられている。石綿のはく離やはげ落ち(劣化)が目立ち始めたのは二〇〇二年のこと。階段、

教室、製図室、実験室など各所に及び一部の教室は約三〇平方メートル。石綿と発がん性が強いといわれるアモサイト、クリソタイトと判明した。工学部には約六〇の研究棟があるが、他の棟に天井表面に石綿を使っているところはない。石綿の繊維はラロン(一)の千分の二単位、吸い込むと肺細胞に突き刺さり、石綿肺と呼ばれる肺障害の原因となることは知られていたが、最近になって欧米諸国やWHO(世界保健機関)で発がん性が確認され、日本でも大阪の医師チームが石綿繊維工場の調査で従業員の肺がん死が一般人の六・八倍にもなることを発表。労働省が建築を断念し、石綿汚染を知りず



阪大環境工学科研究棟

石綿教室、授業イヤ!!



吹き付けられた石綿がポロポロになっている阪大環境工学科研究棟の天井。その拡大。天井から採取された石綿の電子顕微鏡写真(太いのがアモサイト、細いのがクリソタイト)

石綿関連疾患を三年間診察している横山邦彦(国立療養所近畿中央病院理学診療科)医師の話。米国では、既に七年前にEPA(環境保護局)が校舎内の石綿吸引の危険性を指摘、学校からの石綿除去が進んでいる。阪大のケースを機に、石綿を労働環境問題から身近な室内環境問題としてとらえる必要がある。

石綿工場の従業員が肺がん死亡率が一般より目立って高いのもその危険性が指摘され、規制の動きも出てきたのに、学生、研究者の間では石綿繊維の吸引による健康への不安が表面化、授業を敬遠する動きや撤去を求める声も出た。新たな環境問題とされる石綿汚染が、環境研究の本拠地を持ち上がったことに大層ショックを受けている。